

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話『花鳥風月および星・虹を愛でながら』」

主宰論説 55

天地人：天に星、地に花、人に愛、または、天の理、地の利、人の絆

《天に星、地に花、人に愛》という言葉は、武者小路実篤さんの色紙によく見られる。昔、大学の教養学部時代、下宿の部屋の手紙入れを、柱に取り付けていたが、その手紙入れのところにも、その言葉があったことを、何故か思い出す。高山樗牛による『天にありては、星、地にありては、花、人にありては、愛、これ、世に美しきものの最たらずや。』の文章に由来するようである《ウィキペディア日本語版より》。白樺派の代表作家の一人として知られる、武者小路実篤さんが、気に入って、生涯うまくならなかったと言われる絵の添え言葉として、よく使ったようだし、世の人も、一般的によく使うが、明治時代の文芸評論家高山樗牛の言葉であったことを、改めて認識したいものである。

また、《天の理、地の利、人の絆》という言葉も、よく耳にする。中国の《魏蜀呉三国史時代の名戦略家として知られている諸葛孔明の、戦いを有利に導く処世術を表すものと思っていたが、どうも、そうではないようである。「天の時、地の利、人の和」として、中国の春秋戦国時代の儒学者である孟子の著書『孟子』公孫丑下篇に登場する言葉が起源であるようである。孟子が、「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と述べたことが始まりで、戦争における勝利条件を論じた中で、天候や地形よりも人心の一致団結が最も重要であると説いたそうである。この思想は、古代中国の兵法書『孫子』にも通じるもので、戦略論としてだけでなく、政治哲学やリーダーシップ論としても広く受け継がれてきたようである《ことわざ・慣用句の百科事典等より》。平和は、誰しも望みたいが、それを実現するためには、人の連携・協奏・外交などを使った、工夫と努力が必要であることを説く言葉のようである。

日頃何気なく使っている言葉・格言なども、振り返って、その意味や起源を調べてみるのも、悪くないし、有用かと思われる。

最近、人工知能（AI）の“光と影”の影響への有効対応が、議論される中、言論の自由と責任、著作権・知的財産権の保護、オリジナルティーと創造性についても、よく考える必要も増している。

諺、名言、慣用句などについても、出典を探るようにする配慮もあっていいだろうと思う。

2026年5月17日初稿

2026年5月18日午前再校

2026年5月29日午後修正

2026年6月4日見直し修正版